

芸術教育文献解題2

山 口 喜 雄
石 野 健 二
茅 野 理 子
中 島 望
田 和 真紀子
村 松 和 彦
株 田 昌 彦
山 田 有希子
本 田 悟 郎

宇都宮大学教育学部紀要

第63号 第1部 別刷

平成25年 (2013) 3月

Bibliographical Notes 2 of the Literature about the Education through Arts

YAMAGUCHI Nobuo, ISHINO Kenji, CHINO Masako,
NAKAJIMA Nozomu, TAWA Makiko, MURAMATSU Kazuhiko,
KABUTA Masahiko, YAMADA Yukiko, HONDA Goro

芸術教育文献解題2

Bibliographical Notes 2 of the Literature about the Education through Arts

山口 喜雄, 石野 健二, 茅野 理子, 中島 望, 田和 真紀子,
村松 和彦, 株田 昌彦, 山田 有希子, 本田 悟郎
YAMAGUCHI Nobuo, ISHINO Kenji, CHINO Masako,
NAKAJIMA Nozomu, TAWA Makiko, MURAMATSU Kazuhiko,
KABUTA Masahiko, YAMADA Yukiko, HONDA Goro

1. はじめに

2002年の行政改革以来、「事業仕分け」の流れで芸術教育削減論が一部マスコミの論調に見え隠れする昨今である。2008年9月のリーマン・ショックによる世界的不況で2012年に至っても閉塞感は増すばかりである。目先の効率性が優先され、人間にとって本質的に重要でも地味なことが軽視されやすい状況が強化され続けている。

そういう時こそ、1970年代の米国に芸術教育不要論が起り、芸術の街ニューヨーク市でさえ図画工作専科教員99%、中・高校の美術教員を多数削減をするに至り、「学校が灰色になった」という証言とその後の動きを想起してほしい。東西冷戦下の1970年代、米国は大不況であった。莫大な軍事費が優先され、教育予算は大幅削減で、緊急を要しない教育内容は切り捨てられた。当時、1957年のソ連による人類初の人工衛星打上げ成功というスプートニク・ショックの記憶が新しく、科学教育振興を重視し、「お遊び」「お飾り」と思われがちな芸術教育不要論が沸き起こった。

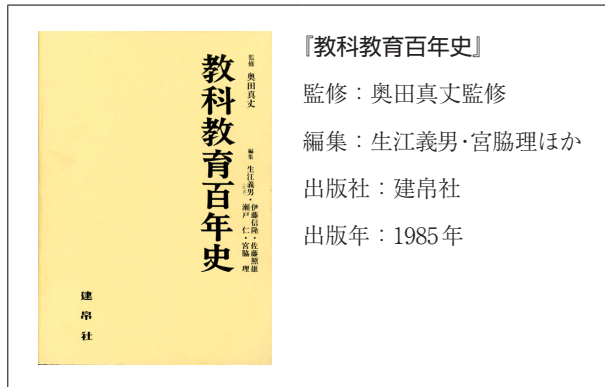
「予算カットの直撃は致命的でしたね。(中略)特に低学年の児童はかわいそうですね。子どもたちは絵や音楽を通して、よその国のことを学ぶのですから、これはお手あげですよ」との同市小学校教員の発言記録が残っている。芸術団体の集合体が教育長に要望書を出しても改善されなかった。日本では「不要」と見なされた制度の復活はほぼ皆無である。けれども、米国は違った。1977年に若き実業家ロックフェラー4世(J.D.J.Rockefeller,IV, 1937～)を座長に芸術・教育・マスコミ・勤労者・芸術愛好者・政府など広い分野から、芸術教育者を含めずに構成された審議会が、後記する芸術教育の調査研究報告書(Coming to Our Senses)を提出した。

「(前略)審議会は、読み書き、算数などの基礎教育を支持していないわけではないが、正しく指導された芸術は、個人の発達にとっては正に基礎となるものであるとしている。なぜならば、芸術は他のどんな科目よりも、子どもたちの諸感覚を目覚めさせるのに役立つからであり、目覚めた諸感覚は学習のパイプ役を果たすものである(後略)」

日本における豊かな芸術文化環境は、米国の1970年代の芸術教育不要論が未来を生きる子どもたちの夢を萎ませた歴史的経験に学び、かつ2001年12月制定の文化芸術振興基本法の具現化に自覚的に努める若人の増加とそれぞれの熱意ある活動にかかっていると看做しても過言ではない。本稿がその一助になることを切望する。(山口喜雄)

2. 芸術教育文献解題

2-1 解題『教科教育百年史』



『教科教育百年史』

監修：奥田真丈監修

編集：生江義男・宮脇理ほか

出版社：建帛社

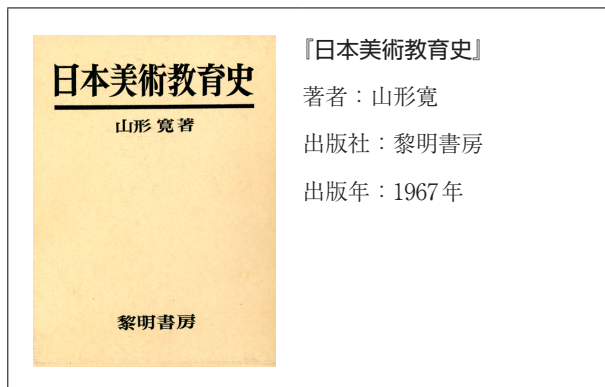
出版年：1985年

「学校教育の当面する現実的な課題と将来構想に資する」ために教育学者の奥田真丈（1922～2010）監修、65氏執筆による本編全1,101頁と資料編全561頁のB5判両書籍入り上製本で35,000円、1985年刊である。

本編は序論、近代教育の萌芽とその時代、近代学校制度の成立・発展と教科教育、戦後の学校教育と教科教育、今後の課題と展望、五部構成による国社数理音図体

技外の各教科や道徳・特別活動の歴史である。第三部の「図画工作、美術」では、「なぜ描くことので教育から始めたか」や「人間が責任を持つことが教育」など専門外でも注視したくなる項立てである。第四部では、「新学制に伴う図画科と工作科の統合」「系統学習と教科の再編から」などの章や「米国美術教育の動向」の項は教科を越えて興味がそそられる。音楽教育の頁でもH・リードの著作を例示し、「芸術教育こそが核戦争を防ぐ唯一の道」（858頁）、芸術哲学の成立こそが「音楽教育がその真の意味を見いだす」と明言している。「芸術による教育と美術教育」の項と併読すると、道徳・特別活動を含む学校での全教科教育の一環としての美術教育の俯瞰が可能になる。そこが、各教科単独の教育史との大きな相異といえる。資料編は幕末・維新时期、明治期、大正期、昭和前期、昭和後期の五期に分け、教育法規、教育思潮、実践、学校・学級の経営等々を掲載している。総合的判読により時代状況と教育の関係性が豊かに浮上する。（山口喜雄）

2-2 解題『日本美術教育史』



『日本美術教育史』

著者：山形寛

出版社：黎明書房

出版年：1967年

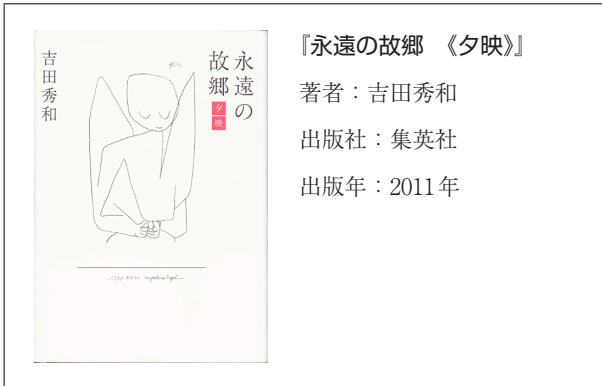
1章：教育制度創始期の美術教育（以下、「の美術教育」を略）、2章：教育制度の基本樹立期、3章：教育制度整備期、4章：数学振興期、5章：戦時体制期、6章：戦後の構成で、92年間（1872～1964）の美術教育制度史で全965頁の大著である。

著者の山形寛は毛筆による図画教育全盛の1888年に誕生、1967年79歳で本書を刊行、84歳没に至る歩みそのものが日本美術教育形成史といっても過言でない。

1908年20歳で福井県師範卒、1911年に東京高等師範図画手工専修科入学、1914年に宮城県女子師範教諭兼訓導、自由画運動興隆期の1920年に東京女子高等師範助教授、以後1926年までに『クレヨン画の指導法』『創作の手工教育の実際』『竹工教材とその取扱』『図画の新指導』『クレヨンから水彩へ』『きびがら細工』を刊行、1927年に教科書検定委員、東京女高師教授を1942年退任し文部省図書監修官、文部省退官2年後の1948年に教育課程審議委員、1953年発足の日本美術教育連合初代理

事長、1957年に編著全6巻『造形教育大事典』（不味堂）を刊行、1965年INSEA東京大会で講演など枚挙のいとまがない。本書の魅力は、「手工教育の蹉跎」「鉛筆画・毛筆画問題の帰結」「自由画教育運動の発端と経過」「異色ある図画教育説」「流産学習指導要領」「尾張一宮大会と東京大会とのめごと」「民間団体の美術教育運動」等々、制度の背景や動きをも率直に記したところにある。（山口喜雄）

2-3 解題『永遠の故郷《夕映》』



『永遠の故郷 《夕映》』

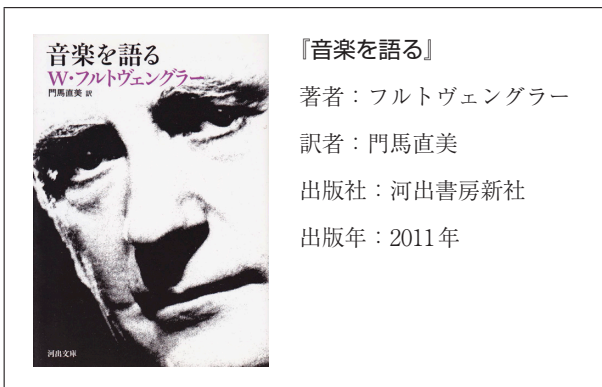
著者：吉田秀和
出版社：集英社
出版年：2011年

『永遠の故郷』は、音楽の意味・意義を、現代に生きる人間の視点から常に問いかけてきた音楽評論家吉田秀和の最後の作品である。全体は4部からなり、この《夕映》はその最後にあたる。元は雑誌「すばる」に掲載されていたもので、それを単行本としてまとめたものである。著者の人生の様々な時期に心に触れた90曲あまりの歌曲についてのエッセイ集である。第4巻《夕映》は30曲を取り上げ、それぞれに原

詩と自身による対訳、手書きの譜面を載せ、それに人生を直截に結び付けながら、著者の心にとっての歌曲の意味を追体験し、掘り下げていくものとなっている。後程、著者は4部作全体で自叙伝の断片を書くつもりでいたと語っている。歌曲とは何かということに対して、ハイネの「歌曲とは心の歌に他ならない」という句を引用し解説している。著者にとって歌曲とは、作曲家が言葉によりそって、言葉を介して、自分の心を書く、あるいは自分の心で書くものである。また、言葉によりそって音楽を書く時、その音楽は詩の持つ論理性、構築性を無視できない。したがって作曲家は、音によって、言葉によりそった建築物を構築する。そこに彼らの心が乗りうつっていることになるのである。歌曲には規模の大きな交響曲、オペラ等とは違った親密な世界がある。したがって、ここでは人間個人と音楽の係わり方について、他からは決して読み取ることのできない関係を見るのである。

（石野健二）

2-4 解題『音楽を語る』



『音楽を語る』

著者：フルトヴェングラー
訳者：門馬直美
出版社：河出書房新社
出版年：2011年

20世紀最高の指揮者の一人であるフルトヴェングラーは、いまだに絶大な人気がある。その芸術は、作品の構造分析に基づきながら、それをダイナミックにかつ即興的に再構築したもので、生きた音楽としての性格を十分に備えたものとなっている。演奏芸術の在り方を理想的に具現していたフルトヴェングラーが、演奏あるいは音楽の在り方をどのように考えていたかを探ることは、とかく作品

の再現において情報処理に迫られた機械的で、意味内容の希薄な演奏の多い現代において極めて重要

なことと思われる。『音楽を語る』はナチス政権下の1937年において、音楽評論家・作曲家であるアーベントロートとの対談集として計画されたものである。対談とはいえ、ほとんどが著者の独白と言っているものである。この中で、環境と芸術について語った所では、国内亡命者としての困難な立場を反映し、必ずしも明瞭な言説とはなっていないが重要なことではないだろう。中心は聴衆、演奏、劇的な音楽、ベートーヴェン、指揮者と試演等についてのものである。芸術家と聴衆の間の相互の関連にとって実際のところ重要なものは何か、演奏における音楽的論理の統一の必要性、作品とその生成に係る芸術家にとっての即興の重要性、作品の本質から遊離した技巧性というものへの危惧等、国内亡命者として生きた著者の主張は強く揺るぎなく、音楽の在り方に対しての重要な示唆に富んでいる。(石野健二)

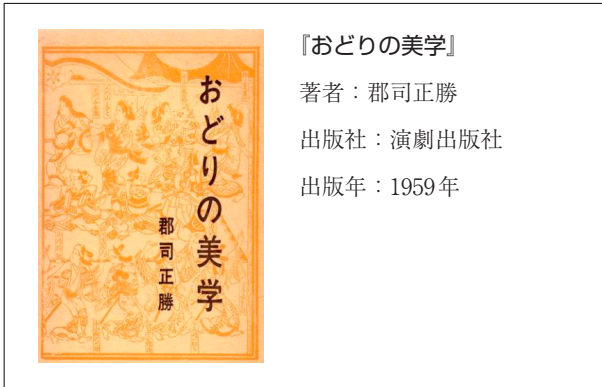
2-5 解題『舞踊学原論：創造的芸術経験(現代舞踊学双書1)』



M. N. ドゥブラーは、ウイスコンシン大学に於いて、アメリカの大学ではじめてのダンス専攻のコースを設け、「最初の専門的な演技グループを組織し、更に修士・博士の課程を開くという驚異的な開拓をなしとげた」と訳者は伝えている。本書は、1940年に出版された“Dance; A Creative Art Experience”の邦訳であり、その緒言の中で、ドゥブラーは、「成長しつつある芸術として、舞踊は、何にもまして、

『哲学者－科学者－芸術家』なる人を必要としており、彼は彼で、芸術の価値と意味に通じている共鳴する公衆を必要としているのである。」と結んでいる。大学時代に生物と化学を主専攻、哲学を副専攻としたドゥブラーの学識は、9章(舞踊の文化的概観・舞踊の領域・舞踊を通じての教育・技術と表現・有機的統一としての形式・形式と内容・形式と構造・舞踊と音楽・なぜ踊る?)からなる本書の至る所で示されている。特に、第3章「舞踊を通じての教育」の中で、「教育には二つの相がある」として語られる教育論は、万人にとっての舞踊教育の意義を説く上で重要なキーとなっている。一つは受け入れる－印象づけられる能力であり、他は外へ出す－表現する能力である。教育は、この「二つの働きによるパースナリティの開発であるとし、身体のパースナリティの外的様相で外からの刺激を受け、身体という媒体を通して、内的意味を表現し、コミュニケートするところに、舞踊活動の特性をとらえている。」と訳者は解説しているが、この章に、A Creative Art Experience(創造的芸術経験)の意義が集約されていると言える。(茅野理子)

2-6 解題『おどりの美学』



『おどりの美学』

著者：郡司正勝

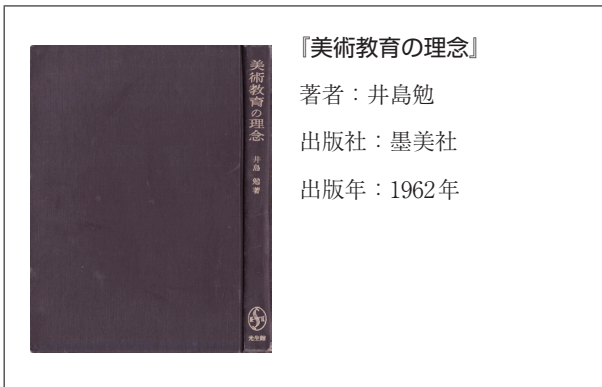
出版社：演劇出版社

出版年：1959年

歌舞伎研究や演劇評論で著名な郡司正勝が舞踊へ目を開くきっかけは、小寺融吉の導きによると自身が記している。小寺は舞踊と民俗芸能の研究家であり、『舞踊の美学的研究』（1928年初刊）等の著書がある。その交流の中で郡司の舞踊観にも少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。本書は、主としてかぶき舞踊を中心に論じられ、おどりの生態、おどりの歴史、おどりの美学、かぶき舞踊、おどりの周

辺の5章から構成されている。歌舞伎研究に民俗学の成果をとり入れ、新しい研究方法を確立したと評される著者の姿勢は、例えば「おどりの美学」の章で論じられている、「舞いのもつ動かずに舞う」という理念の根底には、舞いは祈りであり、呪術であるという気迫の力の表現が本来であり、その上に、古代の貴族社会や中世の武士社会を通して、動ぜぬことの立派さ、美しさを理想とする思想が生まれていったのだとおもう。」や、「おどりの構えという構造のなかには、たんに形の上の姿勢（ポーズ）といったものだけではなく、民族の精神生活が美意識として反映しているのを知るのである。」の中に反映されている。「舞踊の生命はポーズやパにあるのではない。その連続に生命感をもたせることにある。生命感とは、リズム感にはかならない。日本ではこれを間という。舞踊は技術のみみせるものではない。その技術を支えている精神がものをいうのである。（略）見せようとしなくて、しかも人を深く感動させるのが、技術をのり越えた芸術の生命というべきものあろう。」の件は、芸術としての舞踊に共通する本質と言えよう。（茅野理子）

2-7 解題『美術教育の理念』



『美術教育の理念』

著者：井島勉

出版社：墨美社

出版年：1962年

解題者が講読の時間に用意する井島博士の書は、『美学』（創文社、1958）・『書の美学と書教育』（、1962）、そして『美術教育の理念』である。

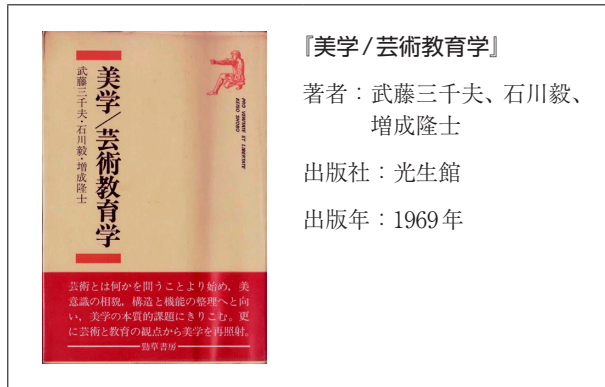
井島博士は京都出身の美学者である。「藝術の創造と歴史」で京都大学文学博士となり、母校の京都大学文学部（美学美術史）教授を昭和47年に退官する。また、1951年設立「日本美術教育学会」の初代会長でもある。

ところで、美術教育とは何か。それは個々の藝術的信念が前提となるものではなく、客観的な美学的認識が準備されてこそ公正である。学校の中では、彼らの発達段階に応じた体験を重視し、そのような営みがあってこそ伝わる＜何か＞がある。“美術教育の正道は美術の本質に基づいて樹立されねばならない”。本書は、その＜何か＞を井島美学の立場から導いてくれるのである。

さて、およそ大学の講義では、その専門分野における表記（記号）法を統一するが、井島博士の著

書は用語集としての役割も担っている。殊に書道とその教育の問題について、美学者からの発言は実に稀であり、書とその周辺分野における美の問題を、制作者（作家）とは異なった視点から整理してくれる。その他、『藝術とは何か』（アテネ文庫,1953）・『美と近代』（民主教育協会,1963）・『芸術の世界：その鑑賞と理解』（創文社,1964）など、美術教育に携わる私たちには命題ばかりが並ぶ。（中島望）

2-8 解題『美学/芸術教育学』



『美学/芸術教育学』

著者：武藤三千夫、石川毅、
増成隆士

出版社：光生館

出版年：1969年

およそ大学で美学・芸術学を学ぶ学生は、美術史・音楽史など史学を基礎としながら哲学（理論研究）を究めるのである。また、近年ではその実践的研究として、音楽や舞台が主役のアーツ・マネジメントだろうか。

そもそも、美学は美の形而上学的ないし心理学的な分析であるから、時代性とは別に、民族性という大きな要素がある。わが日本、そして『東洋の美学』ともなれば、近年では今道友信（TBSプラタニカ、1980）、水尾比呂志（美術選書、1963年）となるが、解題者が講義で使用するのは専ら後者である。

ところで、「芸術教育学」なる学問について、石川はその著書『芸術教育学への道』で、芸術教育を“芸術の教育、芸術への教育、芸術による教育のどれでもなく、人間、芸術、教育の本質を辿って、理想と自由を修得する技術（芸術）”とし、本書（第三部）では芸術教育学そのものの概念規定をさし示している。本書は、石川はじめ三人の著者による三部構成となっており、第I部（増成）で芸術の制作と受容を考察し、第II部（武藤）でバウムガルテン、カント、ヘーゲルを経た今日までに至る美学説を整理している。そして、第III部（石川）では古代から近代の芸術と教育をめぐる言説を分析する。

さて、わが日本の芸術とその独自の思想となれば「藝道」となる。久松真一『絶対主体道』、古田紹欽『禅論』については別稿に譲りたい。（中島望）

2-9 解題『日本画の行方』



『日本画の行方』

著者：上村淳之

出版：美術年鑑社

出版年：1992年

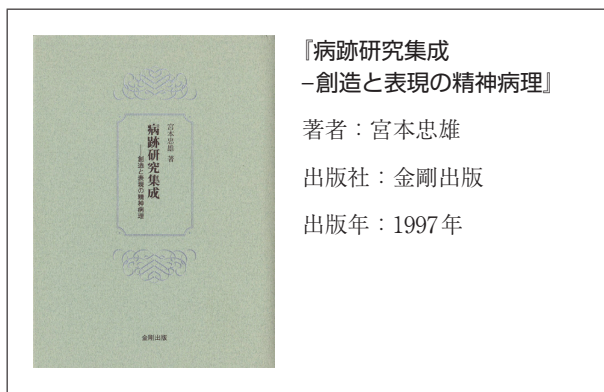
本書の著者・上村淳之氏は、祖母が松園、父が松篁という3代に渡る高名な日本画家である。また、淳之氏は京都市立芸術大学で学生を指導した経験を持ち、「絵画を説明することば」と「絵画を教えることば」は非常に論理的かつ明晰である。

本書の中で筆者が特に面白く感じたのは、淳之氏が冬休みの宿題として戸外で梅を描いてくることを学生に課すエピソードである。その目的は、実際に戸外

で写生することによって、梅の香りや冷たい空気といった花の外側を取り巻く“空気”を感じ、それ

を絵に反映させること—東洋画の背景となる「虚空感」を学ばせること—にある。しかし、その意図を理解せず、折り取ってきた梅の枝を室内で写生した学生の絵には、“空気”が描かれていない。それを淳之氏は絵から見抜くのである。筆者の専門である日本語学でも、実際の用例にあたって分析したものは、学生の「目」と「思想(考え方)」が反映されているのがわかる。一方、他者の論を引き写したものを学生に説明させると、そもそも学生自身の「目」と「思想」によって立論されたものではないので、論理が破綻する。研究対象(モデル)を観察する「目」と「思想」の大切さ・生のデータやモデルに対峙することの重要性をどう学生に理解させるかは、芸術教育のみならず広く高等教育において普遍的な課題であろう。本書は「物の見方を教える」という広い意味での教育に関する優れた随筆の一つと言えよう。(田和真紀子)

2-10 解題『病跡研究集成—創造と表現の精神病理』



『病跡研究集成—創造と表現の精神病理』

著者：宮本忠雄

出版社：金剛出版

出版年：1997年

宮本は、「パトグラフィー (Pathographie) は、日本では、病誌、病跡、病蹟などと訳され、精神的に傑出した歴史的人物の精神医学的伝記やその系統的研究をさすことばとしてもちいられていて、精神医学ないし精神病理学の応用領域のひとつをなしている (p.15)」と述べている。本書の中では、「Ⅱ アントロポグラフィー (人間誌) のほうへ」としてフランツ・カフカからダリ、モーリス・ユトリヨ、高村光

太郎・智恵子、土田秋成、出口王仁三郎、カール・グスタフ・ユング、ジェイムズ・シドニー・アンソールまでを取り上げている。また、ムンクについては、「Ⅲ ムンク病跡の脈絡」として、p.165からp.247までムンクのみに83ページを費やして記述されており、「Ⅳ 展開と生成」とでは、再びカフカが挙げられ、「不思議の国のアリス」と「鏡の国のアリス」のルイース・キャロルとそのチャールズ・ラットウィジ・ドジソン、その他、枚挙に遑がないほど広く芸術家について病跡研究からの解説がなされている。「いいかえると、現実への不適応・自我と現実のあいだの緊張・自己のなかの矛盾と分裂などが、すぐれた才能と結びつけば、かえって彼らの内面世界を肥やすことになり、あるいは、健常で凡庸な人間には見えぬ世界に目をひらかせ、それが天才的業績にまで結晶するのである。(p.47)」芸術に携わる人間は変わり者が多いという、広く人口に膾炙した見方がなぜなされるのか。その答えが本書にある。(村松和彦)

2-11 解題『イメージ—視覚とメディア』



『イメージ—視覚とメディア』

著者：ジョン・バージャー

訳者：伊藤俊治

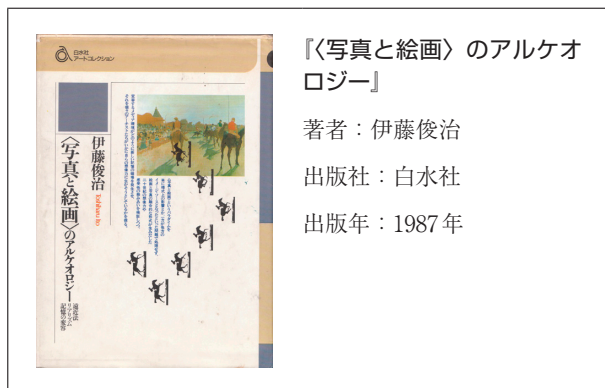
出版：PARCO 出版

出版年：2005 年

「見ることは言葉よりも先にくる。子供はしゃべれるようになる前に見、そして認識する。(p.008)」本書はバージャーと訳者である伊藤俊治による〈見ることのトポロジー〉の二部構成になっている。バージャーの『イメージ—視覚とメディア』は、i イメージの変容、ii 社会空間になったイメージ、iii 「見ること」と「見られること」、iv 見られる女たち 取り囲む女たち、v 所有するタブロー、vi 「見ること」のな

かの「所有すること」、vii 広告の宇宙の7つの章で構成され、これは訳者のあとがきによれば、「イギリスBBC放送で4回シリーズとして放映され、その画期的な企画内容とナレーションをおさえた映像主体の大胆な構成で評判を呼んだTV番組『ウェイズ・オブ・シーイング』もとにしたテキストで、芸術だけを優位にあるものとして特異視せず、もう一度絵画や広告を等価に置き直してみようとする意図を受け継ぎ、『見ること』そのものの再検討をせまってくる」ものである。さらに訳者は、「バージャーの論が十数年前に書かれたもの」であるがゆえに、「めまぐるしく変わるメディアの状況の中で論旨やあらたに生じてきた問題をいくらかでも補えれば」という思いから〈見ることのトポロジー〉を加えたと述べている。「見ること」を中心として、古今東西の研究を包括的に取り入れて視覚メディア論を展開する本書は、いささかの古さも感じず現代に置いても十分私たちに限りない示唆を与えてくれる良書である。美術を学ぶ人にぜひ一読をおすすめしたい。(村松和彦)

2-12 解題『〈写真と絵画〉のアルケオロジー』



『〈写真と絵画〉のアルケオロジー』

著者：伊藤俊治

出版社：白水社

出版年：1987 年

西洋絵画史において、19世紀から20世紀への絵画様式の劇的な多様化は写真の登場を抜きに語れない。平面への表現という点で共通する写真と絵画は、視覚形式間での相互影響の側面のみで捉えられる事が多い。本書は、写真と絵画の視覚形式における特性に加え、写真機が確立された時代や文化的な背景をもとに解説している。

写真以前の絵画での空間表現はルネサンス期に発明された線遠近法によって担われ、視覚のピラミッドによって舞台を固定的に設定し、その内部で絵の要素を構成していた。その後、世界を画面となるヴィジュアルフィールドと捉え、それを枠によって切り取る方法へと変化した。それは、ドガの作品でより顕著なものとなっており、空間を断片的に切り取る視覚の変遷が写真の導入と深く関わっていたと述べている。

次に写真と絵画の関係として19世紀におけるリアリズムについて、モデルニテ（現在性）の観点から理想化を排除してあるがままに描くクールベ、写真図版と素描をモンタージュしたマネの作品を

事例に挙げ解説している。

他方で、写真自体を作品とした同時期の事例として、シャルル・ボードレールによる写真批判とそれに対する写真の展開として絵画表現に傾倒したオスカー・レイランダーの芸術写真を紹介している。またそれに対して「自然主義写真」を掲げ写真独自の表現について開拓を目指したピーター・ヘンリー・エマーソンの運動も取り上げ、後の独立した表現へと展開する写真の流れを示している。

その後の、19世紀後半の写真における「機械の眼」としての独自性については、マイブリッジの連続写真などを引用し、社会的側面を背景に「機械の眼」と「人間の眼」の格闘の中で、20世紀の写真の表現への繋がりを提示している。

最後に画家でもあるデヴィッド・ホックニーのフォト・コラージュでは、新しいイメージを示している。その上で、写真や絵画を考える上で、様式の変遷だけではなく、それらが生成された社会的背景や環境を含めた視点を持つこと、またその意識は写真や絵画を見る側に重要であることを示唆している。(株田昌彦)

2-13 解題『絵画技術入門』



『絵画技術入門』

著者：佐藤一郎

出版社：美術出版社

出版年：1988年

著者の佐藤一郎氏は東京藝術大学で教鞭をとっており、西洋絵画における技法材料研究の第一人者である。本書の構成は、絵画技術の基礎の解説から始まり、素材の特性、混合技法における制作過程、作家の作品における技法の紹介へと展開している。通読すると、絵画を構成する様々な要素の関係が実感でき、また実例が豊富であるため実用書としても活用できる。

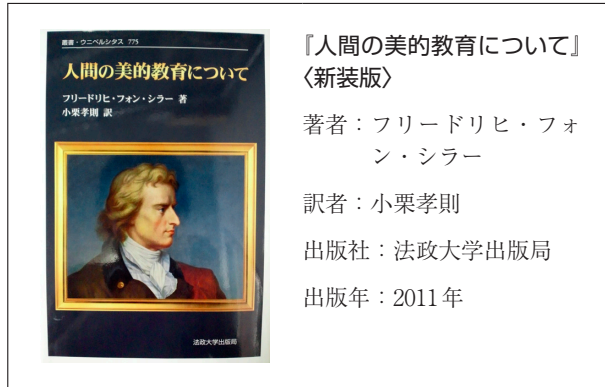
絵画技術の基礎では、遠近法や色材における分光発射曲線のデータによる解説、明暗とヴァールール、絵具の重層構造と媒材（メディウム）の関係について触れ、絵画制作に必要な構図や配色に関わる内容が理解できる仕組みとなっている。

混合技法とは、テンペラ絵具と油絵具を併用して描く技法を指し、西洋絵画の主流がテンペラ画から油彩画への移行期に見られる。その技法の特徴として、不透明層と透明層の重層構造が制作過程を基に分かりやすく図示している。また、テンペラ絵具を作るための媒材や透明層を施すための画用液の例も多数記載され、求める表現に応じて選択できる。

ヤン・ファン・エイクの『アルノルフィニ夫妻の肖像』における技法分析では前章でも顕わになった油絵具の素材の特徴について触れている。その主な例として衣服部分の緑色の方法を取り上げ、鉛白と岩緑青と樹脂酸銅を用いて不透明層と透明層を組み合わせ、明暗と共に深い色彩の効果が表れていると解説している。

このように本書は、題名からは入門書として受け取られるが、西洋絵画のテンペラ絵具と油絵具の混合技法を起点として油絵の本質的な表現特性を浮き彫りにした、実用書としても有効な文献である。(株田昌彦)

2-14 解題『人間の美的教育について』

『人間の美的教育について』
〈新装版〉

著者：フリードリヒ・フォン・シラー

訳者：小栗孝則

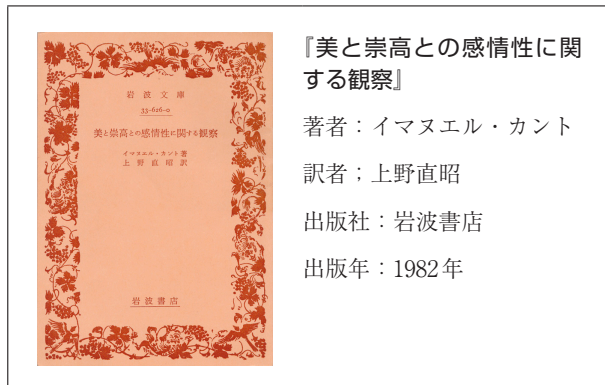
出版社：法政大学出版局

出版年：2011年

シラー（1759～1805年）は、ゲーテと並び「疾風怒濤時代」を代表する詩人、劇作家であり、ベートーベンの交響曲第九第四楽章「喜びの歌」の原作者としても有名。美学史・哲学史上ではカント美学論の批判的継承者として位置づけられる。本書は経済的支援者のデンマーク王子に宛てられた書簡（全27信）からなり、シラーの「美」「自由」「国家論」「教育論」を展開したものである。〈美は感性と理性の

調和「美の戯れ・遊び（Spiel）」である〉。シラーのこの「美の戯れ」論は、カントの影響をうけたものであるが、ここからシラーはさらに独自の人間論を展開する。「人間はまったく文字どおり人間であるときだけ遊んでいるので、遊んでいるところで彼は真の人間」（第15信）である。人間は「感性（肉体的・物質性）」と「理性（精神的）」との調和（美的遊戯）においてこそ人間らしくあり、本来の「自由」を獲得するという。理性と感性を対立させたカントをシラーはこうした人間観により乗越えようとしたとされる。当時のヨーロッパは、仏革命後の混乱期にあり、近代化が遅れるドイツにおいても社会不安が支配的であった。そんな中、シラーは、独自の美論・人間観から、理想国家論（本来の美と自由が実現した国家）を構想し、そのための芸術を重視した美的教育論も展開する。ディルタイ（1833～1911年）によれば、シラーこそが人間社会における芸術家の存在意義を認めた最初の人物である。本書には、本文の最初と最後に訳者による解説（「展開」と「反映」）があり、当時の時代背景とともにシラーの美学・人間観・美的教育論を読みとることができる。（山田有希子）

2-15 解題『美と崇高との感情性に関する観察』



『美と崇高との感情性に関する観察』

著者：イマヌエル・カント

訳者：上野直昭

出版社：岩波書店

出版年：1982年

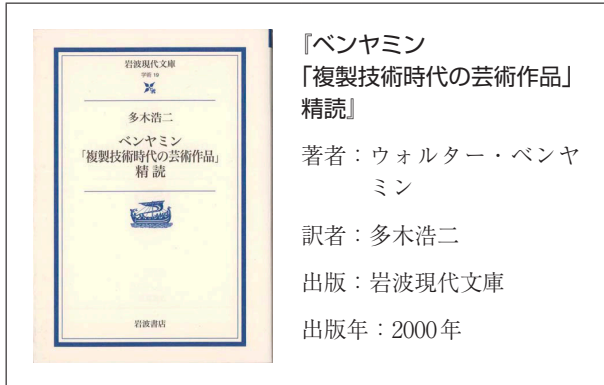
西洋において最初の本格的な美学論とされるカント『判断力批判』の一部素案となるような著作（1764年刊）。タイトルに「観察」とあるように、彼特有の堅苦しく難解な論文ではなく、読みやすいエッセイ調の本。「崇高」と「美」に関する感情や心理を軸に、カント独特の道徳的・美学的観点から人間観察が繰り返されている。

第一章では、具体的事例をもとにまず「美と崇高」の一般的違いが明らかにされ

る。聳えたつ雪山、荒れ狂う嵐、ミルトンの描く地獄などは「崇高」の感情の対象であり「恐怖」を伴う。他方、花が咲き誇る草原、小川のほとりに草をはむ家畜が点在する光景などは「微笑み」を伴う「美」の感情の対象であるという。第二章では、この区別が人間の行為や性格・心情などにも適用される。自己犠牲を伴う利他的行為は「尊敬」に値する「崇高」な行為であり、洗練や丁寧さなど「愛」される性格は「美」とされる。古代の四体液説に基づく人間の「気質」（憂鬱質、胆汁質、粘着質など）について

も、美と崇高の両要素から分析され興味深い。第三章は男女関係における「美と崇高」を論じたもので、カント独特のジェンダー論とも言えよう。崇高は男性に、美は女性に帰属するという独断調の分析には女性差別的観点を確認できる。第四章では、美と崇高の感情にもとづきヨーロッパ諸国の国民性が分析され、アフリカ、アジア、日本への言及もある。生まれ故郷を生涯一度も出たことがないと言われるカント。本書はその豊かな知識から著されたが、他方で、モラリストであると同時に偏見に満ちた彼の本音の人間観も垣間見られる興味深い一冊である。(山田有希子)

2-16 解題『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』



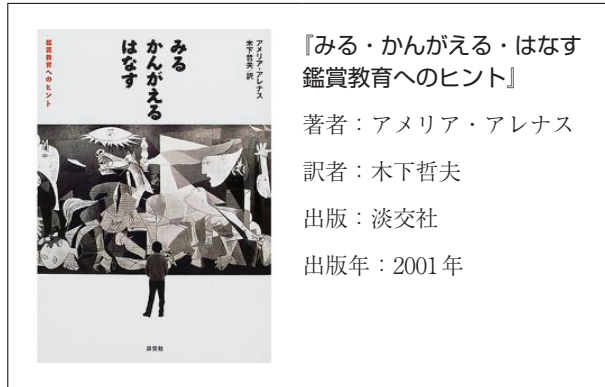
ドイツの思想家、ウォルター・ベンヤミン (Walter Benjamin, 1892 -1940年) が1936年に発表した“Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit”の邦訳書である(この論文の邦訳は他にも、晶文社、ちくま学芸文庫などからも刊行されている)。

複製を手掛かりに芸術の本質を捉えるこの論考において、過去から現代の芸術は常に原理的に複製可能であったとされ

た。古代ギリシアのテラコッタを複製芸術の起源とし、中世の腐食銅版画から19世紀初頭のエッチングをその系譜として論じた。そして、芸術と複製の重要な転機に、19世紀中葉の写真を挙げたのである。

写真によって芸術は何を変容させたのであろうか。写真は質の高い複製を大量生産する。したがって、それまでの造形芸術に不可欠な「手わざの価値が変容」したのである。これに伴い、かつての芸術が「いま」「ここ」にしか存在しえないという一回性に支えられ、その真性の象徴「アウラ」が喪失するというのである。これこそが、この論考で導かれた芸術価値の変容であるが、ベンヤミンはこのような芸術の変貌を憂いてはいない。むしろ、芸術が一回性に根差した「礼拝的価値」から移動可能な「展示的価値」へ移行することで、より多くの受容を可能にするとして、例えば映画産業やダダの動向を肯定的に捉えたのである。この論考は、芸術をメディアと見做し、社会や政治文化に照合し分析を加えた点においても先駆的な探究である。(本田悟郎)

2-17 解題『みる・かんがえる・はなす 鑑賞教育へのヒント』

『みる・かんがえる・はなす
鑑賞教育へのヒント』

著者：アメリカ・アレナス

訳者：木下哲夫

出版：淡交社

出版年：2001年

人が作品に向きあうとき、美はいかに生成されるか。著者アメリカ・アレナスは1984年から1996年までニューヨーク近代美術館の教育部で活動し「ビジュアル・シンキング・カリキュラム (The Visual Thinking Curriculum)」を専門的に実践した。ここでは、作品を見ることを出発点に、対話を通して鑑賞者の経験に根差した自由な発想を積極的に引き出そうとした。グループで作品を囲み、教育プログラム

参加者たちの言語活動を誘発する。その過程において作品に深く向き合うこと、つまり、「みる・かんがえる・はなす」という行為から新たな価値を生み出そうとするのが、アメリカ・アレナスによる鑑賞実践である。これは「対話による鑑賞」とも呼ばれ、美術館の鑑賞だけではなく、学校教育における図画工作科、美術科の鑑賞にもその理念と方法論の両面から大きな影響を及ぼした。

本書は鑑賞のあり方を問い直すものである。著者による鑑賞の手法の解説ではなく、人間が芸術作品に向き合うときの様態から鑑賞の理念や考え方を導くものである。鑑賞においては、教育者に不可欠な美術の知識や理論などを、同じように鑑賞者の側もそのまま知識情報として学び、それを鑑賞の拠り所にする必要はない。鑑賞の価値と本質は、「観察、思考、言語活動」を通して、子どもから大人までの多様な鑑賞者が「開かれた作品」の再創造にあたることである。鑑賞者が作品そのものとコミュニケーションすることの重要性こそが本書を通して再認識されるのである。(本田悟郎)

3 あとがき

芸術教育文献に触れた方に「人間にとって本質的に重要でも地味なこと」として、児童の大怪我後の復活を助け、晩年の認知症の老人の生きる支えとなった3例を示したい。

「交通事故により後遺症を負った児童の回復過程と美術」と題する口頭発表を〈第32回InSEA (国際美術教育学会) 世界大会2008 in 大阪〉にて当時、宇都宮大学大学院1年生の金澤貴子氏が行った。交通事故で頭部に大怪我をして幼児程度の知的活動や運動しか行えなくなった小学6年生の実妹が、医師の指導と家族の手厚い看護のもとで、低次の美術活動から始めて最後には高校・短大の入試に合格するに至るプロセスを研究的に発表した。

また、題目「人間理解と美術教育 ―絵が好きな79歳の祖父と美術科2年・20歳の私」の口頭発表を〈第39回日本美術教育研究発表会2005 (InSEA-JAPAN)〉にて当時、宇都宮大学教育学部2年生の浅見英孝氏が行った。若い頃から絵を描くことが好きだった祖父が晩年に認知症が重度化の過程にあった。言語表現能力は後退し、写実的な描画能力は低下しても、描画行為の時間が祖父の人間らしく生きる支えになったという研究報告であった。

2012年8月に、筆者は87歳の母を亡くした。重度の認知症の末に危篤状態になり、他界するまでに50余日の時間を得た。大きな声で話しかけても筆者に目を向けることはほとんどなかった。そこで筆者が行えたのは寄り添うことと、小学校で習い覚えたハーモニカで母がよく口にした懐メロの演奏ぐらいであった。母は眼を細く開き、懐メロのハーモニカの音に顔を向けた。その眼に涙が流れて

いることが何度もあった。

この3例だけで結論づけることはできないが、美術や音楽が生涯の始めと終わりに人間らしくあることに大きな力をもっていることを否定することはできないであろう。そして、身近に体験し感動したことは、明確に伝えることができる。芸術教育文献を一読し、その記述に促されたら、素朴な芸術活動を身近な人とともに行ってみてはどうだろうか。(山口喜雄)

付記

- 1) 「芸術教育文献解題2」は、研究代表者、山口喜雄の企画・発案によるもので、本論の編集は、本田悟郎が行った。本論の執筆者は、文頭に記載のとおりである。
- 2) 各解題の執筆者名は、解題ごとに文末に記載した。
- 3) 解題にあたった文献の名称、著者、出版社、出版年等は、それぞれ文中の図版に添えて記載した。

